

「ボランティア論」のKJ法による学習成果のまとめ

木下 香織*・古城 幸子

新見公立大学看護学部

(2014年11月19日受理)

新見公立大学看護学部の「ボランティア論」は、3年次生を対象に開講している専門基礎分野の選択科目である。授業目的は「人々のより良い未来のために、ボランティア活動の意義と実際について学習する」である。学外非常勤講師の都合により、最終2コマを古城、木下で担当することとなった。本稿では、最終回におこなった『ボランティアとは』をテーマにKJ法を用いたグループワークの成果について報告するものである。短時間のグループワークではあったが、学生の意見を有機的にまとめることができていた。
(キーワード) ボランティア, 学習成果, KJ法

1. 科目「ボランティア論」について

専門基礎分野の選択科目として、1単位15時間、3年次に配当されている。担当は学外非常勤講師で、授業目的を「人々のより良い未来のために、ボランティア活動の意義と実際について学習する」、到達目標は「ボランティア活動の意義について理解し、参加を促す」と設定されている。授業の概要は「ボランティアとは何かを関係性の形成という観点から、実践的かつ理論的に学び、グループワークをとおして意義を考えることができる」ことであり、金子郁容著「ボランティア」の輪読を中心に、ディスカッションを加えて授業目的を達成するよう計画されている¹⁾。2014年度は11名が履修した。

2. 担当した2コマの進め方

全8コマのうち、6コマを終了した時点で、担当教員の都合により、関連科目である「地域ボランティア活動」を担当する古城、木下に残る2コマの担当依頼があった。授業も終盤になっていることから、1コマめを集団討議、2コマめをKJ法によるグループワークを計画した。

2014年5月22日(1コマめ)は古城、木下、履修者の13名で集団討議をおこなった。「ボランティア論」のこれまでの学習や個人の体験など自由に発言を求めた。ボランティア体験のある者が半数程度で、募金活動や地域の清掃活動などのほか、前期に計画した「地域ボランティア活動」でのサテライト・デイに参加した学生も数名いた。学生からの活発な発言が得にくく、教員がボランティア体験について語り、各自の体験や思いについて発言を求め、

終了後にA4用紙1枚の感想の記述を課題とした。

5月29日(2コマめ)は、「ボランティア論」のこれまでの学習や個人の体験、本日の討議内容を踏まえて、『ボランティアとは』をテーマにKJ法を用いたグループワークをすることとした。ワークの準備として、『ボランティアとは』をテーマに自分の意見を考え、1枚のカードに1枚の意味内容となるよう記録して持ち寄るように説明した。

3. KJ法を用いたグループワークの方法

学生は1人10枚程度のカードを準備してグループワークに臨んだ。11名の学生が2班に分かれて、KJ法の手法を用いてグルーピングの作業を行なった。グルーピングにおいては、内容の類似したカードを集めて表札を付ける作業を繰り返し、小グループ、小グループ同士で中グループ、中グループ同士から大グループを作ることにした。

時間の都合上、2班ともに中グループがほぼ形成できた段階で空間配置と各グループの関連を検討し、1班5分程度で空間配置の意味する内容について説明を求めた。時間の都合で、図解化や文章化に至ることはできなかった。

最後にグループワークの感想について、A5用紙1枚の感想の記述を課題とした。

本稿では、『ボランティアとは』をテーマにKJ法を用いたグループワーク結果と感想の内容を報告する。なお、報告にあたり、2014年度に「ボランティア論」を履修した11名に、報告の目的、学習成果の取り扱いにおいて個人が特定されないよう配慮すること、学習成果の使用を拒否できることおよびそのために不利益を被ることはないこ

*連絡先：木下香織 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

とを説明し、学習成果の取り扱いに同意が得られたもののみ掲載した。なお、KJ法を用いたグループワークの結果については、全員から公開の同意が得られた。

4. グループワークの成果と感想

A班6名のグループワーク結果を図1に示した。46枚のカードから小グループ14個、中グループ5個を形成した。以下、カードに記載された生データを『』、小グループ名を〈〉、中グループ名を《》で表す。

図の中央に、〈ボランティアを始めるきっかけ〉→《ボランティアは喜びや経験、達成感がある》→「愛着形成」→「参加することで自分の考え方や価値観が変わることがある」→〈ボランティアにはまたしたくなる魅力がある〉へと矢印が引かれ、再度〈ボランティアを始めるきっかけ〉へ循環するようにつながっている。ボランティア活動を時間軸で表すような関係性がうかがえる。また、《ボランティアは直接的・間接的に誰かの役に立つ》から《ボランティアは喜びや経験、達成感がある》へと→が引かれている。その他、独立した中グループとして《ボランティアの概

念》《ボランティアをする人には自発性・主体性が必要》《ボランティアは相手がいることで成立する》を形成した。

B班5名のグループワーク結果を図2に示した。55枚のカードから中グループ13個、中グループ2個を形成した。

図左下〈自分の意思で行動する〉を始点として、〈ボランティアに参加して初めての体験ができた〉→〈見えない形で報酬が得られる〉→〈嬉しい気持ちになる〉→〈自分の成長に繋がる〉→〈また参加したくなる〉→〈大きな変化をもたらす〉と7個の小グループがつながっている。《誰かのためになる》→〈嬉しい気持ちになる〉、《誰かとの関係の中で成り立つ》→〈大きな変化をもたらす〉の関係が示されている。その他、独立したグループとして《利益を意識しない》〈ボランティアに関する情報が不足している〉を形成した。時間の関係で整理しきれなかったカードも数枚あった。

グループワーク後の感想の記述からは、「言葉にして考えていくことで本当にボランティアについて知り、考えることができた」「ボランティアの概念、行なう人の気持ち、行ったあとで得た経験や感情について皆で話し合う

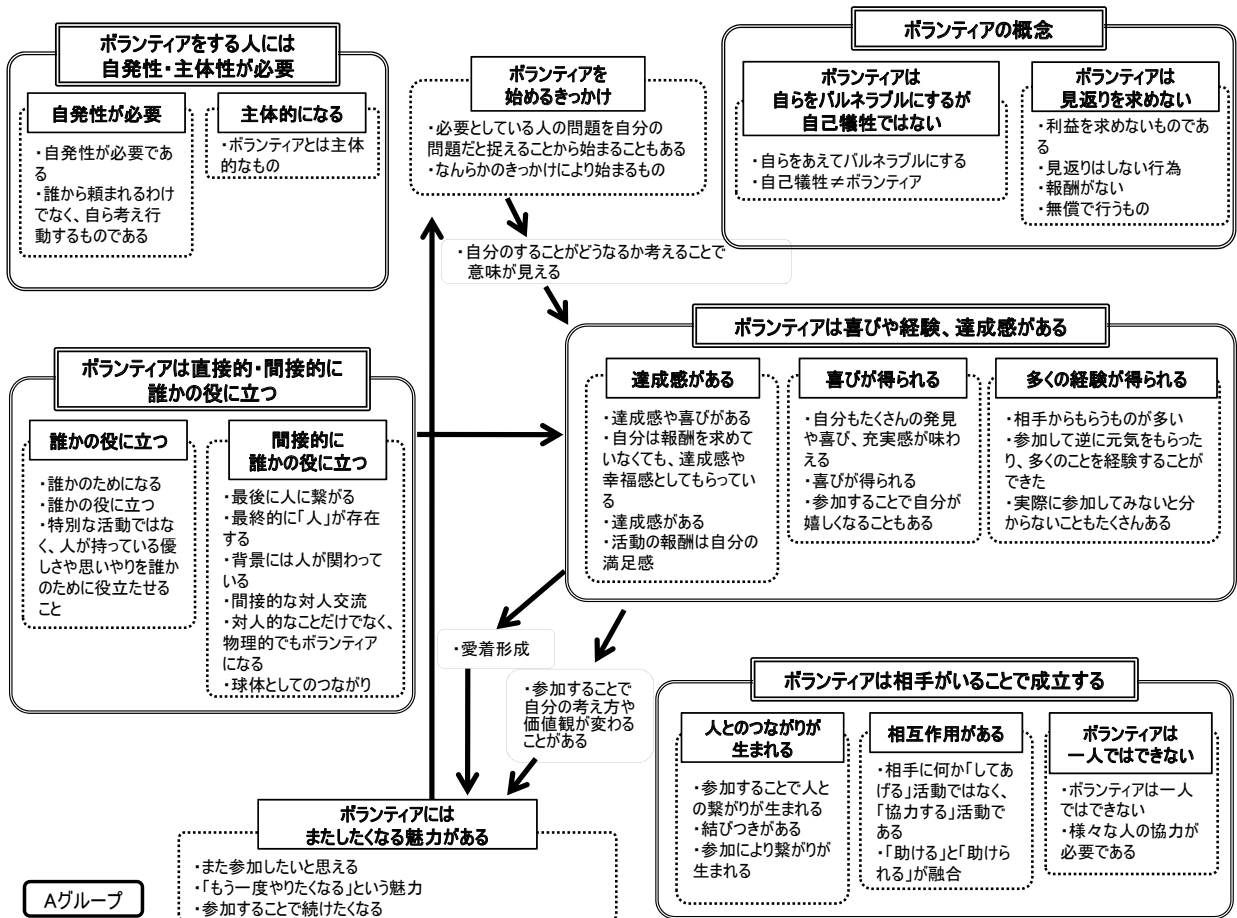


図1 A班のグループワーク結果

ことで理解を深めることができた」「みんなの考えをグループ化してまとめていくことで、あいまいだったところや自分でも気づけていなかったことに対して理解が深まった」など、グループワークによる学習効果が確認できた。

「今までよりボランティアというものを近くに感じることができた」「やはり、一度参加してみることが大切だ」など、ボランティア活動への関心が深まった記述もあった。柴田は、諸氏の定義をもとに、ボランティアとは『「自分から進んで」(自発性・主体性などの「動機」により)、「お金のためではなく相手や世の中のために」(無給性・無償性・非営利性、公益性・公共性・社会性・連帯性などの「目的」をもって、「まだ国や地方自治体が行っていないことに挑戦する」(先駆性・開拓性・創造性などの「役割」を果たす)行為²⁾』と述べている。2班に共通して自発性や主体性の必要性を挙げており、活動未経験者も存在することから、授業の到達目標に対する評価と考えるとともに、活動への参加につながる動機付けとなることを期待したい。

また、柴田は『「自己成長性」もまた、ボランティアの

「成果」にかかわる、重要なキーワード』と述べている³⁾。KJ法では、〈達成感がある〉〈喜びが得られる〉〈多くの経験が得られる〉〈見えない形で報酬が得られる〉〈自分の成長に繋がる〉などの小グループとして表現されている。ボランティアのもつ多くの特性の中でも、学生がボランティアに参加することの意義を感じる特性も挙げられていた。一方で、「自己成長はボランティアの動機だが、目的ではない」ことも忘れてはならない⁴⁾。

文献

- 1) 新見公立大学シラバス, 36, 2014.
- 2) 柴田謙治: ボランティアとは何かーボランティアにかかわる思想の歩みを中心にー, 柴田謙治他編: ボランティア論 「広がり」から「深まり」へ, (株)みらい, 岐阜市, 2, 2010.
- 3) 前掲2)と同じ
- 4) 阿部志郎: 新しい福祉コミュニティの形成へ, 岩波書店編集部編: ボランティアへの招待, 岩波書店, 東京, 33, 2001.

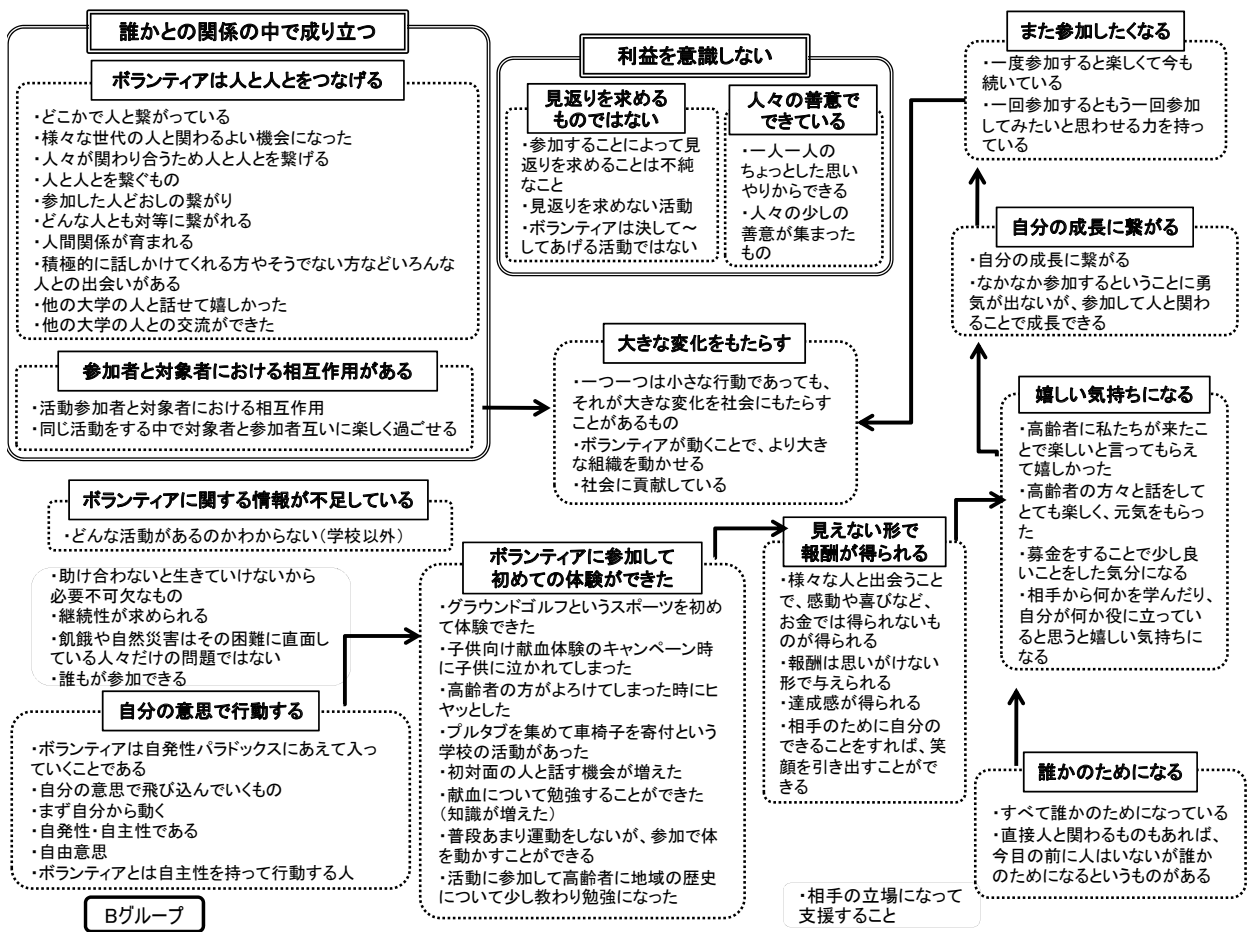


図2 B班のグループワーク結果

- 5) 金子郁容：ボランティア もうひとつの情報社会，岩波書店，東京，1992.
- 6) 鈴木盈宏：ボランティアの可能性-人と企業ができること，廣濟堂出版，東京，2012.